



美しき愛ものがたり 城 夏子

美しき愛ものがたり

城 夏子

三笠書房

美しき愛ものがたり

著者との協定により検印廃止

1970年4月15日発行

著者 城 夏 子
刊行者 竹 内 静 江
発行所 三 笠 書 房

定 価 390円

東京都新宿区戸山町35番地
電話 東京〔203〕7781(代表)
振 替 東 京 2 2 0 9 6

落丁・乱丁のものは本社又はお求めの書店でお取替えます。

© Printed in Japan

誠宏印刷・宮田製本

0295-000102-8936

目次

ショパンとジョルジュ・サンド 7

マリアンヌと若きヴァンサン 19

啄木と小奴 37

若い羊飼いとお嬢さん 59

リリーとゲーテ 71

リボングラスの庭 87

短歌の女王 与謝野晶子 105

れもんと老嬢

131

竹久夢二と笠井彦乃

151

青衣の人

165

藤原義江とあき夫人

185

シャルロットとケストネル

201

松井須磨子と島村抱月

221

猫の運んだ手紙

231

三井寺哀歌

247

あとがき

257



美しき愛ものがたり



美しき愛ものがたり

城 夏子

三笠書房

美しき愛ものがたり

著者との協定により検印廃止

1970年4月15日発行

著者 城 夏 子

刊行者 竹 内 静 江

発行所 三 笠 書 房

東京都新宿区戸山町35番地

電話 東京〔203〕7781(代表)

振替 東京 22096

定 価 390円

落丁・乱丁のものは本社又はお求めの書店でお取替えます。

© Printed in Japan

誠宏印刷・宮田製本

0295-000102-8936

シヨパンとジヨルジュ・サンド

瑠璃色の海に囲まれたマジヨリカ島の晩秋はなお温かく、真昼の太陽は人々を夏姿にさえさせるほどです。フレデリック・ショパンが女流作家ショルジュ・サンドのすすめで、病弱の身を休めるため、また一つには、ショルジュ・サンドとの間に始まった恋を、社交界の話の種にされるのを避けるため、パリを逃れてそこへ落ちついたのは、一八三八年の十一月でした。一年あまり前、パリのサロンで初めてショルジュ・サンドに出会った時のショパンは、男装をして細身のステッキなんか伊達に抱え、煙草をふかすこの女流作家に、魅力のかけらも感じはしなかったのです。

反対にショルジュ・サンドの方では、ひと目でショパンに魅せられてしまいました。どこか弱々しく、神経質らしい、非常にデリケートな、そのくせピアノに向かうと強烈な情熱が嵐を呼ぶ——目鼻立ちには貴族的で、深々と輝く眼が笑うと、溶けるようにやさしい。男装こそしていても、非常に母性的な心情を秘めているこの女流作家は、この異国から来た華奢なピアニストを、優しくかいくるんでわが子のように愛してやりたい——という欲望を抑えることが出来ないのです。

毎夏、ショルジュは幼い頃から馴じんだノアンの田園ですごします。いろいろな芸術家や社交界の婦人たちが訪れます。

サンドはショパンにもノアンへいらっしやいと招きました。しかしショパンはあっさり断りました。

秋、パリへ帰ってから、ジョルジュが招いた客の中に、ショパンも登場します。

次にショパンがジョルジュのサロンでピアノを弾いていた時、ジョルジュはピアノによりかかってじっと、ショパンの眼の中をのぞきこんだままでした。

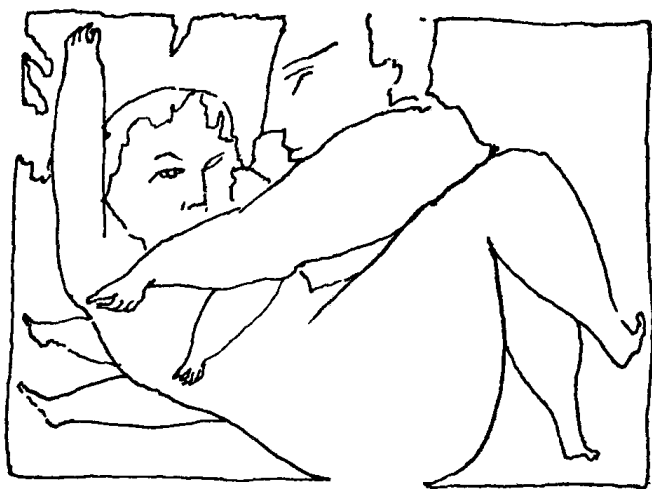
へこの眼はなみなみならず音楽を愛する眼だ。そしてこの眼は、純粹に僕を愛している……

敏感に彼は感じとったのです。すると、彼の眼にはジョルジュの肩まで垂れた栗色の髪の毛の波打つさまやピアノニッシモのようなかすかな話声までが、ひどくなつかしく美しいものに思われるのでした。

ショパンはフランス人を父に、ポーランド人を母に持って、ポーランドのワルシャワで生まれ育ったのです。二十歳にならないうちに、ショパンの作曲と名声は、ドイツ、オーストリアにもひびいていました。ウィーン、ロンドンと演奏旅行を続け、パリに來たのは一八三一年でした。

戦前「別れの曲」というショパンを主人公にした音楽映画がフランスから來ました。その時ショパンに扮したのは眼のまるく大きい、顎の細い、ジャン・セルヴェという俳優でしたが、サロンで叩きつけるように自作の「ポロネーズ」を弾いた時の表情の激しさを今も忘れられないファンは多いことでしょう。あたかもポーランドがロシアに対する独立革命の烽火を上げた時でした。パリの市民たちはみなポーランドに加勢していました。

そういえば、二台のピアノに背中合わせに坐って、互いにまだ名乗りあわず、激しくキイを叩いていたリストとショパンとが、



—君はショパンか。

—リストさんでしょう。

と、片手をピアノに、片手を後にまわして握手をした画面は、見る人をやんやと言わせたものです。

そしてロマン派の恋の詩人ミュッセや肥っちょのバルザックや、ベルリオーズ、ハンサムなハイネ、画家のドラクロアがそろそろ画面に現われ、その中心をなす女性、男装の麗人、ジョルジュ・サンドだったのです。その美しかったこと、ズボンの脚の長かったこと。鞭のようなステッキの似合ったこと。

さて昔話はこの位にして、ショパンの感じやすい心は、今はすっかり、ジョルジュの中にめりこんでしまっていました。あっというまに恋仲になり、すぐその恋人を振ってゆく——という軽薄な社交界の噂話は、決してジョルジュのほんとの姿でないということが、ショパンは次第に判って来たのです。ショパンは、ジョルジュと語り

あつていと、次々と美しい作品が生み出されてゆきます。幼い時から音楽の中で育ったジョルジュ・サンドが、ショパンの作曲のプラスにならないことはありません。

ジョルジュには、最初の結婚によって生まれた、モーリス（長男）とソランジュ（長女）がいました。モーリスの健康のためという理由で、ジョルジュは二人の子供を連れてスペインの知人の紹介で、マジョリカへ旅立ったのです。ショパンとは、途中で合流することにして。

こうして、後世までも消えずに残る恋のマジョリカ島ロマンスが始まるのです。

ところが、冬のマジョリカは酷いものでした。そこへもってきて、ジョルジュ達のやっと借りることの出来た家と来たら大雨が降るとぶよぶよになる荒壁しかない湿気のひどい家でした。

つい十二月終わり頃までは、まだ美しいマジョリカでした。波の音も静寂の中に響くロバの首の鈴の音も、なつかしいものでした。

それが、雨季に入ったのです。

結核だったショパンにとって、悪条件が次々と押しよせて来ました。

家主はショパンの病氣を知ると、家を出てくれと言いました。が、何しろ今から百年以上も昔の、しかも都会を遠く離れた「文化果つる所」です。よい医者もいなければ、よい食べものもありません。結核は死神と思われていました。

借家を追い出されると、ジョルジュは八方奔走して、ひどく荒れ果てた寺院をやっと見つけます。

海にはさまれた山の中腹にその寺がありました。山は青々として、椰子の木がすくすく立っている。太陽の光の豊かな土地でしたが、雇い入れた女中や薬剤師たちは、欲が深く正直でなく、次々と家族の衣と食とをかすめとるのです。

困ったのは女中の作る土地風の料理です。油臭くてとてもショパンの咽喉のどを通すわけにゆきません。ジョルジュは町に下りていって、材料を買い集め、自分で料理しました。今は二人のわが子と愛人のショパンと、まるで三人の子の母でした。その間に、オカネも工面しなければなりません。それには書くことです。

アンドレ・モロアの名著「ジョルジュ・サンド」(河盛好蔵氏訳 新潮社版現代世界文学全集の29)の中では、この時の情景を次のように描いています。

へ夜になるとこの古い建物は月の光で何か幻想的な雰囲気きふくに包まれるのだった。ソランジュとモリスは螺旋階段をのぼって屋根の上によじのぼった。

へ驚が寢床の上高く飛び、時には霧が山をつつみ、人気のない僧院の道しるべとなっている小さなランプが、まるで狐火のように見えた。

というような人里離れた、お化けの棲家すまかみたいなあばら家で、咳ばかりして血を吐いているショパンをみとり、家政婦にもなりながら、ジョルジュは、これ以上ロマンティックな住家はないわ、とうそぶきながら、ペンを走らせることを怠らなかつたのです。